

# 60年後の間隙

## オーストラリア・カウラ日本人捕虜暴動事件の跡

敗戦一年前、オーストラリア南東部の町カウラに収容されていた日本兵一〇〇人以上が、一斉に「脱獄」を試みた。それから六〇年の今年、その場所で記念行事が催される。恩讐を越えて親善を深める契機となった事件を現地から語り継ぐ。

近藤雄生

一九四二年二月一九日、オーストラリア北端の港町ダーウインの空爆に参加していた一機の零戦が墜落した。パイロットは顔面に怪我を負ったものの命に別状はなく、その後捕まってもオーストラリアでの日本人捕虜第一号となった。

私はダーウインで、その零戦パイロットのことを考えながら、日本にいるひとりの老人へ電話をかけていた。その老人もまた同じく六二年前、先の零戦の四日前に飛行艇でダーウインの近海に墜落していた。そして

捕虜収容所跡地。手前の案内板にある写真は、暴動の当日上空から撮ったもの。この暴動によって、この地は第二次大戦におけるオーストラリア本土大陸唯一の陸上での交戦地となった。

零戦が墜落したのと同じメルヴィル島に漂着して捕らわれた後、零戦パイロットと同じ収容所で捕虜生活を送ることになった。

受話器の向こうのその老人の穏やかで元気な声を聞いたとき、私は人生の不思議さを改めて感じていた。老人が戦後六〇年近くを生き抜いてきた一方で、似通った境遇にいた零戦パイロットは六〇年前にすでに死んでいたからだ。

その二人の運命を分けたのは、シドニー近郊のカウラという小さな町の捕虜収容所で起きた日本人捕虜によるある暴動事件であった。

一九四四年八月五日午前二時、雲ひとつない透き通った空の下、突撃ラッパを合図に、捕虜となっていた一〇〇人以上の日本兵が最後の決起へと立ち上がった。それは脱獄というより、死ぬための決起だった。そして自ら命を絶つたもの、撃たれたものを合わせて三三一人の日本兵と四人のオーストラリア兵が死んだ。そのとき合図の突撃ラッパを吹いた

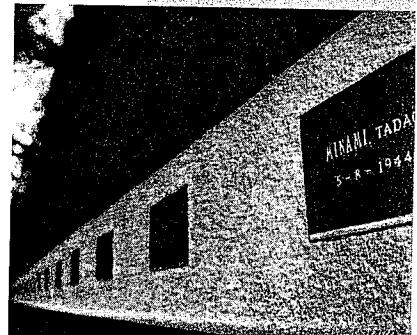
のが、ダーウイン近海の島で捕まった時から「南忠男（ミナミタダオ）」を名乗っていた零戦パイロット、豊島一海軍一等飛行兵だったのだ。

彼はその夜、胸に何箇所も弾を受けたあと、走り抜ける力を失って排水溝まではっていき体を休ませた。そしてポケットから煙草を取り出して火をつけたが、その後、自らまたは誰かがその喉を切り、息絶えた。

一方、いま受話器の向こうにいる老人は少し遅れて突撃に加わった。外に出て行ったときには、すでに目の前に二〇〇〜三〇〇人の動かぬ体が横たわっていた。その中に友人の姿を見つけ、「自分の胸を突いてくれ！」と叫ぶ彼のそばで「死んだらあかん！」と叫ぶその場にとどまった。薄明るくなりかけている中、サーチライトで照らされながらの銃声が続き、二時間ほど後にそれは止んだ。満月と寒さと沈黙だけがその後に残った……。

豊島がこの暴動の中で死を選び、そして受話器の向こうの老人、高原

零戦パイロットだった豊島一海軍一等飛行兵は、今も「ミナミタダオ」の名のまま、カウラの日本人戦没者墓地に眠っている。



希国民が生き抜くことを選んだその日から、今年で六〇年となる。

### すでに歴史となった事件

メインロード一本のみの小さな町の中心から数キロほどのところにある収容所跡地は、今では一面に緑の広がる草原となっている。だが、当時の建物の跡と思われるコンクリートの土台が所々に見えるその静かな大地で、半世紀以上前のその事件の様子を頭の中で想像することは決して難しいことではなかった。この辺りを日本兵たちはバット、ナイフ、フォークなどの「武器」を手に駆け抜けていったのだ。

私はカウラで、事件に直接関わった人物に会いたいと思っていた。観光案内所、役所、新聞社、図書館、退役軍人クラブなどを尋ね回って得た情報を元に、会える限りの人物に会った。だが、事件に直接関係した人は、すでにカウラにはいなかった。「今となっては、多くの人にとって事件はただの歴史となってしまった



んだ」

Cowra Japan Societyの役員で、戦後、事件と強く関わってきたトニー・ムーニー氏はそういった。六〇年という時はやはり短くはなかった。しかし一方この事件は、現在もオーストラリアでは戦争史上最大級の脱獄事件として、また、日本人の考え方を理解する上での一つの実例として、かなり知られているようだった。「生きて虜囚の辱めを受けず」という「戦陣訓」を刻み込まれた日本兵たちにとって、捕虜であることの恥辱は死よりも重いものだったのだと。

事件についてオーストラリア側から書かれた本の中ではおそらく最も詳しく、またカウラで会った人物の何人からも薦められた『VOYAGE FROM SHAME』(University of Queensland Press)の中でも、著者のハリー・ゴードン氏は、「激しい恥辱の思いがいよいよ耐え難いものになってきて、それが一一〇〇人も日本人捕虜たちを集団狂気へと導いた」(訳・筆者)と書いている。

だが、事件をより掘り下げていくうちに、その見方は決して正確ではないだろうと、私は思うようになっていた。

## 生への執着

確かに日本兵たちに、捕虜であることに対する絶望感や恥の意識が強かったことは間違いない。しかし、それはすぐに死と直結するようなものだったのか。やはり生きていたかったのではないのか。カウラの町を歩き、いろいろな資料を読み進めるうちに、私の中でそんな思いは強くなっていった。

元捕虜の一人森木勝氏は自身の回想録『カウラ出撃』(今日の話題社)で、収容所生活中に芽生えた「生への執着」について書いている。そして事件の前日、下士官と兵を分離するというオーストラリア側の意向に反発する形で暴動決行が現実化し、その賛否を問う投票が行なわれたとき、一片の白紙を手にして彼は迷った。

「もとより迷うことなく出撃に賛成の『○』を書いた人たちはある。しかし『×』と書くことは又別の勇氣を要するのである。私同様へ生かへ死かかの決定に迷った人たちは少なくなかったはずである。私は迷った。時間がせまりいよいよ絶対絶命となったとき、私は『○』を書いてしまったのである。」

その投票の結果は、八〇%が『○』

だったという。そして暴動は実現した。しかしその中にどれだけ森木氏のような『○』があったのか。それは、今でももちろん完全にわかったりようもない。だが、その過程を少しでも明らかにしようと丹念な調査を続けた中野不二男氏の『カウラの突撃ラップ』(文藝春秋)からは、森木氏のような人間が多かったはずだということが推測されるのだ。

多くの日本兵たちには、恥の意識とともに、生き続けたいという思いも同時にあった。だが死への暴動に反対であったとしても、一部の強硬派たちの「貴様それでも軍人か!」という言葉に、当時としては論理的に抗する余地がなく、それぞれが葛藤の末、賛成せざるを得ないことになり、実現してしまつた……。

零戦パイロット豊島一の姿を追う中で中野氏が達したそのような理解は、私にもしつくりきた。そして何

よりも、結果として二〇〇人以上の日本兵が死んだものの、九〇〇人近くはやはり死ぬことができなかったという事実にこそ、多くの日本兵の生きることへの執着が表れているように思う。

オーストラリアの人々による理解は、日本人に対して蓄積されたイメージの影響が大きかったのかもしれない。また、戦後も元捕虜たちの多くが口を閉ざし、オーストラリア側ばかりから事件が語られてきたこともその背景にあると考えると、その理解の食い違いもまた、この事件の特徴を如実に表しているのだと思えなくもない。

## こめられた願い

今年七月三一日から八月八日まで九日間にわたって、カウラでは六〇周年記念行事が行なわれる。その実行委員会の委員長であるローレンス・ライアン氏が、六〇周年の記念として『Peace Pathway(平和の道)』という道を作り、その一方の端に、ある写真を飾る計画があることを教えてくれた。

……事件が起きた日の朝、カウラの東八キロほどのところにあつたワイアー家に、寒さと空腹に疲れ切った三人の日本人捕虜が逃げ込んだ。ワイアー夫人は、彼らを見ると、まずベランダの席に座らせ紅茶とスクーンを食べさせた。そしてその八日後にさらに二人の捕虜がワイアー家の



豊島一海軍一等飛行兵の乗っていた零戦は今もダーウィンにある。この機体は、ダーウィン空爆の74日前の真珠湾攻撃(41年12月7日)にも参加しているという。



Peace Pathwayに飾られる予定の写真。暴動の8日後の8月13日、ウィア一家の敷地内の丸太小屋から発見された2人の日本人捕虜が連れて行かれる際に、ウィア夫人は食べ物と紅茶を与えた。写真左側にやかんらしきものを持った手だけが見えるウィア夫人の方を、捕虜の1人は見ている。(カウラのウィア一家(the Weir family)提供)

敷地内の丸太小屋から発見され、彼らが連れて行かれるときも、ウィア夫人は紅茶と少々の食べ物を与えたのだ。そのとき、彼女の息子がそばでシャッターを切った……

戦後、カウラの事件を一つの契機として日本とオーストラリアとの交流は確実に深まった。特にカウラは日本と縁深い町となり、立派な日本庭園も造られ、また第二次大戦中のこの国での日本人戦没者は全てこの町に埋葬されることになった。

だがその一方で、この事件がオーストラリアの人々に、多少いびつな日本人のイメージを与えてきた面もあるように思う。もちろん完全な理解を求めることなどできるはずもないのだが、しかし六〇年経った今、あえてさらなる何かを求めるとすれば、

ば、私はやはり、生と死の間で苦悩した多くの日本兵たちの思い、そして生を求めていたにもかかわらず死への出撃に賛成してしまった彼らの人間らしい側面を知ってもらいたいと思うのだ。それはきつと国や文化という枠組みを越えて理解できる気持ちだと思われ、そこにこそ、死んでいった若者たちのドラマがあるような気がしてならない。

生き延びることを選んだ二人の捕虜の姿をうつつしたウィア一家での写真は、もしかしたらそんな日本兵たちの複雑な思いをカウラの町に伝えてくれるのかもしれない。

## 六〇年が築いたもの

ダーウィンの航空歴史博物館には、豊島一を乗せて墜落した零戦の一部が今も残っている。全体的に茶色くさび付いたその機体のコックピット内を覗きながら、私は、ここから緑のダーウィンを見つめていた豊島は、眼下の国で半世紀以上たった後も自分が一つの日本人像として生き続けることは夢にも思っていなかっただろうな、などと考えていた。

そして私が、豊島のことを考えながら老人に電話をかけたのは、その零戦を見た後のことだった。「あのときは満月で、空のきれいな夜でした」

遠く神戸市から、受話器越しに聞こえてきた高原希國氏の柔らかな声は、月明かりに照らされた収容所の

姿を、生々しい色と音とともに、私の中に浮かび上がらせた。

彼もまた、収容所では蜂起に賛成していなかったものの、投票用紙には「〇」と書いた一人だった。そして戦後、暴動を生き残った人たちの一部によって作られた「カウラ会」の会長も務め、事件を通じた日豪の交流へ尽力してきた。「第二の故郷」だというカウラにはすでに五回ほど赴き、今度の六〇周年記念行事にも参加する予定なのだという。

そんな高原氏に、事件に対して自分が感じている日豪間の理解のズレについて話すと、「確かに少しずれていますが」と彼もいった。そして、先のゴードン氏の著書の中では暴動で中心的な役割を果たしたようにも読み取れる南忠男こと豊島一についてはこういった。

「南くんはあんな暴動を起こしたいと思うような人ではありませんでした。むしろ生きていたかったはずですよ」

しかし、高原氏はそのように語りながらも、私とは異なる思いを持っていた。

「でも、今となって特に何かを求めようとは思いません。日豪関係もよくなったし、大事にしてもらったので、ただお礼を申したいという気持ちだけです。これだけの事件を起こして、いまハッピーエンドとなっているのはここだけなのではないでしょうか。戦後オーストラリアには

反日感情も強かったけど、それが親日へと変わっていく過程にカウラの事件は貢献したし、それだけでとても意義があったと思うんです」

高原氏のその言葉からは、六〇年間カウラとともに生きてきた彼の浅からぬ思いが伝わってきた。そしてそれこそまさに、あの夜銃声を聞き、倒れゆく仲間たちを見送った人間の偽らざる思いなのだろう。

六〇年という時を越えて、資料などからしか事件を知ることができない私自身とはもちろん見えてくるものが大きく違う。そう思ったとき、高原氏自身が今年再びカウラへと足を運ぶことの意味を実感できる気がした。

しかしそれでも私には、今は亡き日本人捕虜たちの生と死の狭間での思いがもつと知られるようになれば、と思う気持ちがやはり残っている。それはもしかすると、事件を歴史として見ている次の世代の人間だからこそ感じることもなかもしれない、そう考えると、いつまでも事件を語り継いでいくことの意味がふと見えてくるような気がする。

事件から六〇年経った日のカウラは晴れているだろうか。あの濃く明るい真つ青な空の下で、戦後世代のオーストラリア人たちが高原氏らと再会できることを願いたい。

写真撮影／特記以外は筆者  
こんどう ゆうき・ルポライター。